

伊坂幸太郎

2025.6.19

伊坂幸太郎。我が家の長男の口からよく出ていた作家の名前である。私は、その作品を読んだことはない。だが、なぜだかその名前は知っている。著名な作家の一人ということだろう。

そういえば、こここのところ小説というものを読まなくなつた。自然とそうなつた。きっと他の類の書物を読んでいるからである。小説は読まなくても生きていける。読まなくても困らない。そういった存在である。とはいえ、読めば人生が豊かになる。読めばおもしろく、考えさせられるのも事実である。

伊坂幸太郎氏のことは気にはなつていた。それはなぜか。仙台市在住だからである。作品の中には、仙台のことがよく出てくると息子が言つてゐた。たまたま、伊坂幸太郎氏のインタビュー記事を読む機会があった。それで、ようやく伊坂さんことを知ることができた。

伊坂さんは、書いていてしんどくなることが結構あるという。「伊坂幸太郎だったら、こんな作品だろう」と思う人がいるはずで、そのイメージと違うものを書いたら、読者はがっかりするかなあ、と考えてしまうそうである。

レベルはだいぶ違うが、文章を書く者として、伊坂さんが言つてゐることがわかるような気がする。校長室だよりや園長通信、福島民友新聞「隨想」を読んでくださつた方から感想やコメントをいただくことがある。お話を聞いてみると、その方の好みというものがわかる。すると、その方の期待に応えようとしてしまうことがある。

ところが、途端に書けなくなる。うまく書こうとすると、どうも筆が進まない。ここらへんが素人の悲しさである。そうこうするうちに、自然体へと戻つていく。そうしないと続かない。自分でも何を書くのかわからない。ふと思いつく。急に文章が湧いてくる。それ待つてゐるようなところがある。

伊坂さんには、書けなくなった時期が二度ほどあった。プロでもそうなのか。これまたレベルが段違い平行棒なのだが、自分にも書けなくなるというか、文章が出てこなくなることがある。まあ、いいかと自分をほったらかしにしていると、そのうち復活してくる。切れたバッテリーが充電されるのだろうか。

伊坂さんは、原稿に取りかかる前にコーヒーを淹れる。コーヒーメーカーのセットをする一連の動作をしながら香りを楽しむうちに、仕事のスイッチが入るそうである。これもレベルがかなり違うとは思うが、コーヒーが傍らにあったほうが、筆の進み具合が違う。明らかに冴えてくる。そういう気がする。まずは、手始めに『重力ピエロ』でも読んでみようか。